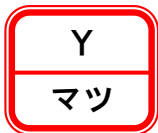




## 『龍の子太郎』

たつ たろう  
まつたに みよ子 / 著  
たしろ さんぜん / 絵

こうだんしゃ  
講談社



小さな村にはあさまと太郎という男の子が住んでいました。太郎の体にはうろこのかたちをしたあざがあるので、村の子どもたちから“たつの子、たつの子 まもの子”とってからかわれていました。いつしか太郎は“龍の子太郎”とよばれるようになっていました。

ある日、太郎は、じいさまと二人でくらしているあやという名の女の子と仲良しになります。あやは、笛を吹くのがとても上手で森の動物たちが聞きに集まるほどでした。

太郎が、楽しく遊び家へ帰ってみると、ばあさまが山から転がり落ちて寝込んでいました。そして、太郎に生きているかもしれないお母さんの話をし始めました。ばあさまの話が終わるころ、あやが赤おににさらわれてしまったとじいさまがやってきました。それを聞いた太郎は、あやを助け、そして生きているかもしれないお母さんを探しに行くと言うのです。さあ、太郎の長い長い旅の始まりです。



## 『歌うねずみウルフ』

ディック・キング＝スミス / 作  
すぎた ひろみ / 絵  
杉田 比呂美 / 絵  
みはら いずみ やく / 訳  
三原 泉 / 訳  
かいせいしゃ  
借成社



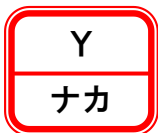
ウルフガング・ア・マウス・モーツァルトは、ピアノ好きの女性の家に住む十三びききょうだいの末っ子ねずみ。かけっこもスケートもビリで、その長いへんてこりんな名前をほかのきょうだいたちからかわれていました。そんなウルフは女主人が演奏するピアノの音が大好き。ある日ウルフが試しに歌って見たところ、自分でもびっくりするほど美しい声がでたのです。それを聞いた女主人のハニービーはこの歌うねずみと仲良くなるために、計画をたてるのです。

母さんねずみがつけた特別な名前をきらっていたウルフが、その名にふさわしいねずみになっていく様、ウルフと仲良くなるためのハニービーの計画、そして、音楽を通してウルフとハニービーが仲良くなっていく様はとても幸せな気分になります。ウルフとハニービーだけでなく、母さんねずみのユニークな性格も読みどころのひとつです。



## 『小さな王さまとカッコわるい竜』

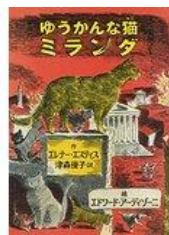
なかがわ ちひろ / 作  
りろんしゃ  
理論社



あるところに、雨のやまない国がありました。この国には小さな王さまがいました。この王さまが、普通の男の子と違うところは、そばにいつも小さな竜がいるということです。

古くからのならわしで、王さまは、国のみんなに贈り物をしなければなりません。そこで小さな王さまは、「晴れ」を贈り物にするために、竜と一緒に旅に出かけました。目指すのは、海の向こうの雨がふらない国です。その国の空では、「ボタンのようなつめもの」が、雨をとめているというのです。小さな王さまは、無事に「ボタン」を手に入れることができるでしょうか。

小さな王さまと小さな竜が、国のみんなのためにさまざまな困難に立ち向かっていく冒険の物語です。



## 『ゆうかな猫ミランダ』

エレナー・エスティス / 作  
エドワード・アーディゾーニ / 絵  
つもり ゆうこ やく / 訳  
津森 優子 / 訳  
いわなみしよてん  
岩波書店



ミランダは、ローマの街に住む黄金色の猫で、16匹の犬を追い払うという武勇伝を持ち、周囲の猫から一目置かれていました。ミランダには、ミランダよりも大きな体をした、プンカという銀色の毛の娘がいました。ミランダとプンカは、大理石でできた家の庭で穏やかな日々をすごしていました。

ところがある日、ローマの街に火の手が上がりました。ミランダとプンカは、勇気を出して、炎と煙の間を走りだしました。二匹は、逃げる途中で、迷子になったり取り残されたりした子猫たちを救い出し、一匹もはぐれずに連れて逃げました。ところが、ミランダたちが、ようやくコロッセオ(円形闘技場)に到着し、体を休めようとしたそのとき、ライオンの唸り声が聞えてきました。

ローマを舞台に母猫ミランダが知恵と勇気を働かせて猫の王国を作り上げるときどきはらはらの冒険物語。